

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

ローマで双子育児⑤

浅田 朋子

2歳になった双子はますます活発になり、朝夕2回、近所の児童公園で遊ぶのが日課となっている。



すべり台やブランコ、アスレチックなどがあり、日本の児童公園と同じような設備である。公園の周囲をぐるりと鉄柵で囲ってあり、入り口を締めると子供が道路へ飛び出すおそれなくなるので、安心して遊ばせることができる。運転が粗いというか、ルール無視が当たり前のローマの道では、大人ですら普通に道を渡るのが危ないことがある。そんな道路へ子供がもし飛び出してもしたら…考

えるだけでも恐ろしい。そんなローマで、この柵の存在は本当にありがたい。

この近所の児童公園は小さくて、そんなに遊具がたくさんあるわけではないが、子供であふれかえることなく落ち着いた雰囲気なので、最近はこちらに通うようになった。最初の頃は義両親の近所の公園に連れて行っており、その公園はきれいで遊具もたくさんあっていいのだが、公園に来ている親子がヤンキー系、もしくはセレブ気取りの親子が多いので、その両極端な雰囲気に疲れてしまった。そして、いつも公園に来る常連の子供たちの意地悪な態度や言葉遣いが「うん、まあ、こどもだしね…」とスルーできないくらい全く可愛げがないのである。

ある日、セレブ気取りの親の子供、女の子2人(5歳くらい)が「どこかディナーにでも行かれるんですか？」と聞きたくなるような服を着て、公園のベンチでお絵描きをしていた。キラキラのバックにたくさんの変ったペンをみて、何人かの子が興味をしめして近くでじっとみている。双子たちもそろそろと近寄って見つめていた。しばらくして1人の子が「僕も書きたいな…」と女の子たちにいうと、チラッと横目でみて「あんた、近づいてこないで。私たちと遊びたかったら、あんたのママにこれと同じペン買ってもらいな！でもこれ高いわよ」みたいな言い方をするのである。これ私の！誰にもかさない！！とか言うのなら「うん、そうね、きみのだもんね」と苦笑いで済むのだが、女の子のこの言い方…。これは笑えまへんで。そんなとき親はというと、他のママ友としょーもない話して盛

り上がっていて、まったく子供を見ていない。まあ、見てたとしても注意するような親にはみえないが。きっと親がこういう言い方してるのを聞いて育ったのでこんなことになるんだろうなあと思い、自分も気をつけなければ、と教訓にすることにした。

さて、我が家のそばの児童公園はというと、なんと国際色豊かである。駐在の家族が多いという地域性もあるが、今日などは10組ほどの親の子供が皆ハーフか外国人の子供であった。お母さんがオランダ人・ロシア人・ドイツ人、両親ともイギリス人・・とまあ、両親ともイタリア人の子供がない！これは学校でも同じ事で、ある保育園でクラスの児童の半数以上が外国人もしくはハーフの子供であつたらしい。待機児童の、両親ともイタリア人の親が「なんでうちの子がはいれないのよ！！」と抗議しているらしい。感情としてそうなるのはイタリアの抱える移民問題が背景にあるからだろう。

前日も書いたが、公園でママ友を作るつもりは全然ない。正直、お友達になれそうな感覚の合う感じの人がいない。でも、最近少ししゃべるようになった親子がいる。お母さんがオーストラリア人お父さんがイタリア人、息子の名がルイスという家族である。

このルイスくん、くりくりの髪にちょっと離れた愛嬌のある大きな目がとても可愛い。そして、性格はおとなしく、とってもぼーっとしている。このぼーっとさが半端なく「立って寝てる？」思うくらいである。お父さんもお母さんも大企業で働き、仕事ができそうなキビキビした頭の良さそうな人たちである。なのにルイスくん、お母さんに英語で何をいわれても「？」みたい顔でお母さんをぼーっと見つめているのである。双子と同じ2才だが言葉があまりでてこないらしく悩んでいた。男の子は言葉が遅いというが、それにしてもしゃべらないらしい。「この子、のんびりしていて活発じゃないから、イタリアの幼稚園じゃなくインターナショナルスクールに3才から行かそうと思ってるの。英才教育も充実してるし。できれば英語で育て欲しいし、将来は英語圏で大学にも行かせたいから。でもね、スクール高いの。月1200ユーロなのよ」といった。1200ユーロ！！幼稚園でこの額を払うのか。。

ちらりとルイスくんを見て「きみ、このホンワカした雰囲気は1200ユーロの英才教育でなくなるんだろうね・・のんびりしたとこ、これがきみのいいとこやと、おばちゃんはどうんやけどなあ」と小声の日本語で話しかけた。

さて、のんびりといえば、同じマンションの2階にすむロシア人のお母さん レーナとイタリア人のお父さんの双子の息子、見かけは強面の弱小部隊である。2歳の彼らもほぼ言葉を話さない。マンションの中庭や廊下で奇声を発しているのは何回も耳にした。「きゃー、きゅおえーう、あ、あああああー」とかいった具合である。体が大きいだけに、そこらじゅうに響き渡っていた。それを聞いた義父は「あれはな、暗号だな。特殊訓練をまたロシアで受けてきたな」と言っていた。

レーナはまたまた双子の事で悩んでいた。「パパ、ママ、ペッパーピッグ(アニメ番組のタイトル)しかいわないの」。それは、たしかに少ないな。。。「あ、でも Ecco!はいうかな。産まれてから毎日ロシア語で話しかけてるのに、いまだにロシア語しゃべらないの。もうね、ロシア語レッスンのスクールに週1でもいいから通わせようかと思ってるの」と言った。「えー、そこまでせなあかん?」「だって本当にわたしががんばってロシア語教えてるのよ。でもぜんっぜん成果がないの！話さないだけじゃなくて、そもそもわかってもないみたいなの」「でもまだ2才だし」と私が言うと悲しそうに「子供とロシア語で会話したいの・・でもね、教えるのに疲れちゃったの」。これには私も同じ悩みを抱えているので、ものすごく共感できた。

自分の子なのに外国語であるイタリア語を話す。確かにそう育ってきているので違和感はないが、たまに無性に寂しくなる。私の双子たちもいづらか日本語を話すか、普段はほぼイタリア語である。私と双子たちだけの時は日本語で話すか、第三者のイタリア人が入ると私もイタリア語で話す。毎日義両親と一緒に散歩に連れてくれるので当然イタリア語に囲まれていることが多い。焦って日本語でたくさん話しかけようとするほど、なんだか不自然になって、悲しくなる。自分の母国語で子供にしゃべりかけているのに、いつも意識しなければいけない。でも双子たちは私が話す日本語は大体わかっているようであるが返答がイタ

リア語なのだ。いつかちゃんと日本語で会話できる日がくるのであろうか。たしかに私も不安である。将来ローマの日本人学校に通わせて、それで日本語がマスターできるのだろうか。当然家庭でも努力しないといけませんが、イタリアの小学校と平行してやっていけるだろうか。私自身も…。

そんな悩みを私とレーナがマンションの屋上でしゃべっている横で、双方の双子同士でもみ合っていた。うちの双子の1人を弱小部隊が突き飛ばしたのである。おしゃぶりを啜えながらの強い張り飛ばしに、まだまだ小柄なうちの子はあっさり倒されてしまった。弱小部隊め！早くもロシア戦士へと成長したか！？と思ったが、うちの子を倒して誇らしげに歩き出したその直後に、ホースにつまづき転んでしまい「ママあ～～」と泣いていた。すこしは強さが見られるようになったものの、相変わらずまだまだ詰めが甘いのである。

後日、廊下でレーナに会うと病院に行くという。「具合悪いの？」と聞くと、「Aspettiamo un bambino」と言った。子供待ってる？まだ保育園にいる時間ちゃうの…？と思わず意味を取り違えるほど予想していなかったこの返答。私が混乱しているのを見て、小さな声で「私、妊娠してるの」と言った。「に、にんしん！？こ、こどもができたという、ことかな…それは」あたりまえでしょ。何を妊娠するのよ。今から2回目のエコーなの。この前分かったばかりなの」と照れくさそうに笑った。

この2年間会うたびに「もういいわ、ほんま、双子育児きつすぎる…終わりが見えん」といいあっていたのに、妊娠したと！でもレーナはまだ若い。41才の私には本当にもう体力的にも精神的にも、どうなっても無理で考えもしない第三子。夫婦共々あんなにしんどそうにやつれてふらふらになっていたのに「やることはやってたのね…」と夫ともども感心した。私たちはというと…そんな事をしている時間があれば眠りたい、というのが現状である。

義父にレーナの第三子妊娠をいうと「また戦士がふえるか、それとも女スパイが誕生するか、楽しみだな」と言っていた。レーナとしては「女スパイ」が希望らしい。「三人も男だなんて、考えたくない」と言っていたが、どうなることやら。

子供の成長につれて親の悩みも増えてくる。寝

てミルクを飲んでいる赤ちゃんから、成長して言葉話すようになり喜んでいたのもつかの間、話したら話したで、また新しい悩みがでてくる。新しい成長に喜び、悩み、を何度も繰り返して親も子供とともに成長していくのだろう。

「言葉」の成長に悩む外国人の母親と話す中で、やはりそれほど人にとって、言語とは大切なものなのだという事に、あらためて気づかされた。

イタリアで育っていく双子たちにとってイタリア語は第一言語になるだろう。日本語は「母国語、国籍を持つ国のことば」として習得して欲しい。しかし「あなたは日本人だから日本語を勉強しないといけないの」というより、日本も日本語も「お母さんの育った国、お母さんの話すことば」として興味を持ち、自分にとって大切な言語だと感じてくれればと思う。

(元当館語学受講生)

～会館だより～

イタリア語 無料体験レッスン

1月より開講の冬期イタリア語講座に向けて、体験レッスンを開催します。入門者向け。事前予約制。

● 京都本校：日本イタリア会館

1/13(金) 11:00～12:30

1/7(土) 11:00～12:30

● 四条烏丸：ウイングス京都

1/16(月) 19:00～20:30

● 大阪梅田校：大阪駅前第4ビル

1/11(水) 19:00～20:30

イタリア語 無料カウンセリング

学習経験者向け。事前予約制。

● 京都本校：日本イタリア会館

1/7(土) 14:00～(各人30分ほど)

スペイン語 無料体験レッスン

入門者向け。事前予約制。

● 京都本校：日本イタリア会館

1/7(土) 13:00～14:30

続イタリアってなんだ？

国司 航佑

前回、前々回と、「イタリアってなんだ？」というタイトルで記事を書いた。そこでは、ダンテとダンテ作品の伝承とに注目しながら、「イタリア語」という概念が成立していった経緯に考察を加えた。しかし実のところ——読者諸賢には非常に申し訳ないことだが——私はこれらの記事の内容に満足していない。というのも、「イタリアってなんだ？」という問は、長年私の頭を悩ませてきた難問であったが、その解を導くための研究に割ける時間がここ半年全くなかった。だから、前回、前々回の記事においては、《大変な気になっていた難問》に対して、《なんとなくそうだろうと思われる解》を提示することしかできなかった。本当はもっと時間をかけて、この問題にじっくり取り組みたいのだが、と思いつつ……。

そうこうしているうちに、夏休みに入りようやく少し時間ができた。そしてこの機会に、大分前に購入したが本格的に読むには至らなかった作品を再び手に取った。Francesco Bruni 著 *Italia. Vita e avventure di un'idea* (『イタリア——ある概念の生と冒険』、以下『イタリア』と略記) がそれである。私がこの本を最初に手にしたのは、今から5年も前、ナポリに留学していたときのことであった。お世話になっていた教授から、『イタリア』の出版記念講演会があるから来てみないかと誘いを受けていたこともあり、近くの Feltrinelli でこれを購入して講演会に向かったのである。最初の数ページだけ一読した後で…。

実はその年2011年に、イタリアは国家統一150周年を迎えており、各地で様々な関連本が出版されていた。当然 Bruni もそうしたコンテキストの中で『イタリア』を書いたはずである。が、この本が描く「イタリア」は、一風変わって見えた。今でもよく覚えているのだが、その講演会で著者 Bruni は、

「私が描こうとしたのは、実体としての『イタリア』ではなく、概念、あるいは単語としての『イタリア』でした」と述べていた。この言葉は、当時の私にとって妙に説得力のあるものであり、また新鮮に響くものでもあった。ところが、そんな刺激的な作品も、怠惰な私はすぐに読み始めることをしなかった。そしてそれ以来、もっぱら昼寝用の枕として活躍し続けたのであった。



【*Italia. Vita e avventure di un'idea* 表紙】

画像出典: <http://www.ibs.it/code/9788815139559/bruni-francesco/italia-vita-avventure.html>

それがこの夏、とうとう『イタリア』の本領が発揮される時が来た、というわけである。そのページを再びめくってみると、やはり目から鱗の情報が沢山載っていた。500頁以上に渡る浩瀚なこの本の内容は、一片の記事で語りつくすことは無論できないものである。だから今回は、最初の2章について、少しでもその内容を紹介できればと思う。第1章では、イタリアという単語の起源について、古代ギリシャ、古代ローマの世界に遡って考察が

加えられている。そして第 2 章では、ダンテが描いた「イタリア」について、すなわち「言語統一体としてのイタリア」(この表現については、後程解説します)に関して、Bruni の考えるところが述べられている。

Bruni によると、italia の語源とみられる単語が現れる最も古い文献は、紀元前 5 世紀頃に活躍した歴史家アンキオコスのものである。この人物は、当時古代ギリシャの植民地であったシチリア島、シュラクーサイ(イタリア語ではシラクサ)出身であったため、シュラクーサイのアンキオコスと呼ばれる。このシュラクーサイのアンキオコスの著作はあまり多く現存していないようだが、その数少ない史料のうちに、italoi(ギリシャ綴りでは ἰταλοί)という単語がみとめられるのである。アンキオコスは、現カラブリア地方に居住していた民族を指して italoi と呼んだのであった(italoi は italos の複数形)。したがって、イタリアの語源は地名ではなく民族名だったということになる。

その後、まずその民族が居住する地域を示す単語 italia が生まれ、次にこの概念の指し示す地域が、長い時間をかけて、アルプス山脈の南麓まで拡大することになる。そして、こうした過程の中の重要な段階を示したのは、古代ローマが地中海世界を征服しつつあった時代である。ローマは、領域拡大の途中、近隣の諸民族から多大な軍事協力を得ていたにも拘らず、紀元前 2 世紀末から紀元前 1 世紀初頭にかけて成立した新体制において、これらの民族にはローマ市民権が与えられなかった。こうした不当な扱いに不満を抱いた彼らは、同盟を結び、ローマに反旗を翻すことになる(ローマ内戦、紀元前 91 年)。そこで、反ローマをスローガンに結集した民族同盟の呼称が、なんと italicis(通称イタリア同盟)であったというのだ。この同盟は、首都をコルフィーニオに据え、独自の貨幣を铸造した。この貨幣こそが、italia の文字が記された現存最古の資料だという。

さて、ローマ内戦の軍配はローマ軍に上がったが、イタリア同盟の勇猛果敢な戦いぶりは、ローマ軍に驚きを与えるものであった。結果ローマは、イタリア同盟の諸民族に市民権を与えるのみでなく、Italia という名称を自らのものとして使用するこ

とになったのである。その後、市民権が与えられる地域が Italia と呼ばれるようになる。現在のイタリア共和国の国境となるアルプス山脈まで、Italia が拡大するのは、オクタウィアヌスがフィリッピの戦いに勝利した後のことだとされている。こうして、帝政ローマ期にイタリアはアルプス南麓まで拡大したわけだが、ここでの「イタリア」は民族的な統一性を前提にするものではなかった。ローマ帝国内における社会的地位の、空間的な広がりを示す概念だったのである。



【右下から上方向にITALIAと書かれている】

画像出典:<http://molisiamo.it/viteliu-un-incredibile-romanzo-storico-dalle-origini-molisane/>

この時期にできた「イタリア」という概念が、1800 年以上の時間をかけてじっくり醸成されて 1861 年イタリア王国が誕生する、というわけでは決してないところが歴史の面白ところである。実は、ローマ帝国の崩壊とともに、「イタリア」は一種の死語になってしまったというのだ。読者諸賢は、ライヒェナウの辞典と呼ばれるラテン語辞書をご存知だろうか。この辞書は、紀元後 8 世紀頃、スイスとドイツの国境に位置するボーデン湖に浮かぶライヒェナウ島の修道院で編纂されたとされる。前回の記事でも少し説明した通り、ローマ帝国の崩壊以降、ローマ帝国の領域内の言語には徐々に変化が加わっていった。ライヒェナウの辞典が編纂された頃には、一般に話されていた言語(いわゆる俗ラテン語)とラテン語の間に、無視できない乖離が生じていたのだろう。だから、ラテン語辞書が必要となったのである。

ライヒェナウの辞書の中で、italia を探すと

“*italia pro longobardia*”(イタリアはロンゴバルディアを示す)と出てくる。つまりこの時点で、*italia* は廃れ、それに代わるように *longobardia* という名称が定着していたのである。お察しの通り、この *longobardia* は現在のロンバルディーア Lombardia 州の語源となる単語である。この *longobardia* の由来をさらに辿ると、ゲルマン民族の一つで、6 世紀から 8 世紀にかけてイタリアを支配していたロンゴバルド族に行き当たる。この時期のイタリア半島は、ロンゴバルド族の居住地ロンゴバルディアと呼ばれていたのである。

ところで、俗ラテン語は、ラテン語からロマンス諸語への移行期を示す言語とみなされている。だから、一方向的な変化であれば、現在も *longobardia* を語源とする名称が残っていたはずだが、結果的にそうはならなかった。ちなみに、古代ローマ時代に *Gallia*(ガリア)と呼ばれた地域は現在のフランスに当たるが、この *Gallia* をライヒエナウの辞書に引くと “*gallia pro francia*”(ガリアはフランキアを示す)と出る。つまり、フランスという名称は俗ラテン語の時期に定着していたのであり、これは分かりやすい一方向的な変化の例とみることができるだろう。してみれば、*italia* という単語の復権はいつ生じたのだろうか。

実は、この *italia* という単語の復権にも、詩人ダンテが大きく関わっているらしい。私は、前回の記事のおいてもダンテに言及したが、それは彼自身というより、彼が執筆した作品の伝承についての議論であった。すなわち、『神曲』を始めとするダンテのトスカーナ語作品がその後圧倒的な影響力を帯び、それ故、その言語を中心にイタリア語が成立していった、その経緯を説明したのである。ところが、Bruni の著述によって筆者は改めて気付かされたのだが、ダンテは『神曲』をトスカーナ語で書いたと意識していたわけではないようである。自らが使用している言語は、トスカーナ方言ではなく、一種のイタリア共通語だと思い込んでいたのである。

ダンテは『俗語詩論』において、ラテン語の後継民族を「肯定する時に使用する表現」(日本語で言うところの「はい」)を基準に据えて 3 分割している。それはすなわち、*oil* という表現を使う者、*oc* という表現を使う者、そして、*si* という表現を使う者

たち、の 3 種である。そしてダンテは、*si* を使う者たちをラテン人(イタリア人)、*oil* を使う者をフランス人、そして *oc* を使う者をヒスパニア人と呼んだ。彼が先駆的だったのは、使用する言語を基準に民族を区分したことのみではない。地理的な区分もまた、言語を基準に行われたのである。ダンテは、北イタリアからシチリアに至るまで、言語的には一つの共同体(*si* という表現を使う者たち)に属している、と考えた。『神曲』の地獄編第 33 歌に登場する *Bel paese là dove 'l sì suona*(*si* の音が響き渡る美しい国)という表現は、イタリアを指し示す文句として非常に有名である。

以上見たように、ダンテは初めて言語統一体としての「イタリア」概念に行き着いた人物だったと言えるが、Bruni の分析によれば、実はそこに一つの勘違いがあった。というのも、ダンテはシチリアの詩人たちが作った文学作品を読んで、シチリア語も同一の言語系統に属する一言語とみなしたわけだが、実のところそれらの作品は、ダンテが手にする前に、伝承の過程でトスカーナ語に近い言語に翻訳されていたのである。つまり、ダンテがシチリア語だと思っていた言語は、実はトスカーナ風のアレンジが加わったシチリア語だったのであり、それ故ダンテは本物のシチリア語を知らずにトスカーナ語と共通の言語系統に属すものと解釈してしまっていたのである。

今日、イタリアという国家を最初に着想した人物は、ダンテであると言われることが多い。そのダンテが一つの勘違いから「イタリア」という概念に到達してしまっていたのだとすると、歴史とは実に奇妙なものである。

(京都外国語大学講師)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>